



Liberia Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1982 精道教育促進協会(青函三三・三四五二 青星市船戸町12-6)

教皇様の叢

神の御母への奉献

マリアに委ねられた教会は人々に希望を告げる

1981年
無原罪の御宿りの祝日

「神には、おできにならないことはありません。(ルカー・37) 教会はこれらの言葉の助けを借りて、本日マリアの無原罪の御宿りの奥義をたたえます。教会は、「神は私の力」という意味をもつ大天使ガブリエルのお告げの言葉を借りています。」

このように特別な使者を通してお告げをするのは、神の全能の力、無限の愛と恩恵の力にほかなりません。そして、全教会は、天使のお告げの言葉にたえず聞き入り、何回もくり返し、いわば天使と共に、「神には、おできにならないことではありません」と人々に告げるのです。

愛すべき全能の力、無限なる愛の力を考えてこそはじめて、みことばなる神、御子なる神が人になるという事実が説明できるのです。愛すべき全能の力、はかり知れない神愛の力を知ればこそ、人間の両親から生まれ、人間の世代から生まれたおとめが神の御母になるという事実が説明できるのです。

しかし彼女にとってもこれは不可解なことでした。「私は男を知らないのですが、どうし

てそんなことになるのですか？」(ルカー・34) 聖母が属するイスラエルの人々にとってもおそらくそれは理解し難いことでした。彼らの歴史が始まって以来ずっと、まさにこのメシアの到来を待ち続けていたのです。自分たちの召命と試練と苦悩の意味をこの一事にかけていました。

このできごとは、多くの人々にとって理解し難いことです。神の存在を受け入れた人々、神の優しさとおわれみに頼っていた人々にとってさえもそうでした。しかしながら、「神には、おできにならないことではありません!」

本日、教会がこれらの言葉を思い起こさせているのですから、その言葉の中に無原罪の御宿りの奥義に関する解答を求めざるべきです。永遠なる御父の全能の力と無限なる愛の力が聖霊の力と共に働きかけて、神の御子をナザレトの処女の胎内で人とならせましたが、その同じ力が救い主の功徳のおかげで御母を原罪のきずなから守りました。その力が彼女を懐胎の瞬間から聖化して無

原罪としたのです。それと同じ全能の力と愛の力、聖霊の力によって、アダムのすべての子孫のうちからマリアだけが「聖寵みち満てる」状態ではまれるようにされました。

そこで、御告げのとき、大天使ガブリエルは開口一番「めでたし、聖寵みち満てる方」と挨拶することになります。

私たちは、聖三位一体への特別な崇拜の念に満たされて、本日この神の御母の聖堂に集まっています。私たちは、御父と御子と聖霊への感謝の心でいっばいですが、それは全能者の恩恵によって聖母の生涯の最初の瞬間から「偉大なこと」をしてくださったからです。今年第一コンスタンチノープル公会議の一九五〇年記念でもあります。

まさにこれを記念して、全世界の司教が慰め主なる聖霊を崇拝すべく聖霊降臨の祝日に、あのコンスタンチノープルで挙行された感謝の祭礼と霊の一致を保ちつつ、聖ペトロの墓に集いました。

その日の午後、救いの歴史における聖霊の至上のみ業であるご託身の奥義を感謝するため、彼らはここローマの聖マリア大聖堂に参りました。こうして、「聖霊によって、処女マリアの胎内に託身し、人となられた」方が崇められ、またエフエゾ公会議の時代から、テオトコス(神の御母)と教会が呼びびしてきた御方もたえられたのです。この称号を聖母にささげる教会は、聖霊がマリアを通して実現された救いの偉大なみ業への信仰を告白するのです。「神には、おできにならないことではありません!」

この歴史的な祭儀にあずかることは私には許されませんでした。私はその準備のために心を尽くしてきました。そこで二千年に及ぶ信仰だけでなく、現代の教会が神の御母の信心を通して聖霊と続けてきた愛と信頼の特

別な会話をもちあためて表わしたかったからです。教会が人類とともにつらい経験と試練を耐え忍んでいるいま、また教会の中で再生と平和への希望があらたに生まれ出ている今、この会話はますます増大してきます。

実際、先の世界大戦中の困難な時代において、教皇ピオ十二世は全世界を無原罪の聖母のみ心に奉獻なさいました。数年後、この奉獻に、神の御母に特別に愛されているロシアの人々をも含めたのでした。

現代、第二バチカン公会議の仕事に伴って再び、再生の希望が教会の中で芽生えてきました。この希望は一方では様々の困難にぶつかり、他方同時に、絶えず平和が脅かされています。そこで、しばしば教皇パウロ六世が「教会の御母」と呼んだ、神の御母のみ心を通してふたたび聖霊の御助けをねがう必要を感じるのです。

それゆえ、聖霊降臨の日曜日に、全世界の司教が参列するこの大聖堂での荘厳祭儀において、無原罪の神の御母へ奉獻をいたしました。それはマリアに対する教会の愛の証言なのです。教会はみずからの母性の模範として聖母をみつめています。この奉獻は希望の宣言でもあります。あらゆる脅威にもかかわらず、教会は全ての人々に告げ知らせたいと思っています。(…)

本日、私たちがこの奉獻を繰り返します。摂理の導きによれば、「時のしるし」を読むようにと絶え間なくよびかけていらっしやいます。そこで、まさしく時のしるしに従いつつ、完全な一致を保つ教会の、二つの公会議の記念を聖霊降臨の主日に記念したいです。時のしるしに従い、聖ペトロの墓で、主であり生命の与え主聖霊への信仰をあらたにしました。時のしるしに従い、同じ日の夕方に聖マリア大聖堂に集いました。時のしるしに従えば、もともとの旧いことばにもどる、神のご計画を読みとらなければなりません。

本日の第一朗読にあった創世の書のなかにそのようなもとのことばがあります。「おまえと女のあいだに、またお前の子孫と女の子孫との間に、私は敵対をおこう、かれはお前の頭をふみくだき、おまえは、かれのかかとをかむであろう。……」(創世の書3・15)

戦場にいることがわかります。神肯定と神否定の戦いのさなかにおかれているのです。これらのしるしは、私たちが代々に、そして幕を閉じようとするこの千年を共に旅するあの「婦人」を示しているのではないのでしょうか。現在数多くみられる苦しみは、まさしくこの「婦人」と共に対処すべきではないでしょうか。

仕事の世界

母性讃歌

「母性を称える」とは、人間の尊厳と人間についての真理をことごとく受けいれることで、それは懐胎の瞬間からはじめられなければならない。人間は母胎にいるときから、すでに人間なのです。

とりわけ労働者の方々が参加しておられるこの大集会において、一人ひとりの男女に、接拶したいのですが、それは母胎にいるとき、生命を得た最初の瞬間からもおられる「尊さ」のゆえであります。今の私たちがすでに母胎にいるときから始まっていたのです。

人間の尊厳の第一の尺度、諸々の権利尊重の第一の条件は、母親に帰すべき名誉です。母性礼賛のことです。人間を人間としてのはじまりから切りはずすことはできません。今日では、このはじまりを決定する生物学的メカニズムの諸相が深く研究されてきています。そうであればこそ人間のはじまり、まことの人間としてのはじまりが根本的な価値であり、諸権利の基礎であることを一層強く自覚し、一層熱烈に確信してふれなくてはならないのです。人間の第一の権利は生きる権利です。この権利とこの価値を擁護しなければなりません。

せん。そうしなければ、人間の信仰をもとにした考え方も、本当の意味での人間性の発展計画も、すべてがぐらつき崩壊してしまいうでしよう。

ザカリヤ家の戸口で、エリザベトは聖マリアに叫びました。「しあわせなこと、信じたまあなたは。ルカー・45参照) 母性を称えましょう。母性こそ人間に対する信仰のあらわれなのです。(…) 親が子に生命を与えるということは、すでに人間に対する信頼の行為であります。母親はその子を自分の胎内に孕み、出産の苦痛をすべて受け入れる覚悟でいます。そうすることによって、母親は女性として母性としての全存在をかけて人間に対する信頼を宣言しているのです。「母としての価値を証言し」、同時にそれをこえて、「自分とともにいる」孕んだばかりの全く未知の価値をも証言します。それは親の子供として、人間であることの確認として、愛の結晶として、未来に残る家族としてこの世に生を受けるはずの子です。一番近い家族の一員として、同時に人類という家族全体の一員として。

その子供はあるいは未熟児、不適応児、さらには肢体不自由児であることもあります。しばしばこうしたことはあるものです。母性とはいつも苦しみをともない、苦しみで代償を支払う愛であって、この愛が産みの苦しみよりも一層激しくなるときもあります。その

か。私たちはまさしくその婦人のうちに福音の核心から流れ出る剛毅と希望をみつかるべきではないのでしょうか。「神にはおできにならないことはありませぬ。第二ヴァチカン公会議はキリストの奥義と教会の奥義に現存する聖母マリアについて

苦しみは子供に一生つきまとうかも知れませぬ。人間としての価値は、知恵遅れや時には痛ましい身体的欠陥に苦しむ子供や大人においても同様に確認されます。

このことは人間のねうちを生物的生理的な点からのみ決めるのは不十分であり、「人間をそのはじまりから信じなければならぬ」と主張するもう一つの大切な理由であります。

幸いな方マリアよ、御身は信じただから。御身の胎内の実りとして御身の心に宿ったお方はベトレヘムでのあの夜にお生まれになるでしょう。その後、人々に福音を告げ、十字架につけられるでしょう。そのためにこの世にこられたからです。真理を証明するために。その子こそ「人間についての真理」、人間の神秘をはつきりとお示しになるでしょう。最も崇高で究極的召しだし、全人類の召しだし。完全に正常な形にまで発達しなかつた人々の召命をもふくめ、例外なく全人類の召しだしを示してください。資質や知性、感受性、肉体的能力のちがいは関係なく人間性そのもの、人間であるという事実にもとづき召しだしを。そのため、つまり御子の人間性のおかげで、人間は無限の神の似姿であるのです。

仕事と家庭

「人間の仕事」と「家庭」と呼ばれる「人間愛の根本的な場」との間には、緊密で固有の関係があります。「経済全体の中で人間にふさわしい場」を

教えました。が、その教えに則って無原罪の奥義を黙想しましょう。(フランスで)

訂正
(昭和57年1月号
第2頁の「わく内」)
パンとぶどう酒が実存する
かぎり、……
パンとぶどう酒の外観が
残っているかぎり、……

確保するためには、これら根本的な内容を追求する必要があります。事実この場は失われやすいものです。特に仕事を「商品」とか「手段」といった生産過程の一要素と考えるとき、その場は失われるのです。

ですから仕事を評価するとき第一の尺度は家庭であるはずで、家族を養うために働くとは、日々の骨折りをすべて愛ゆえにその仕事につきこむことを意味します。愛が家庭を生むのであり、家庭はたえざる愛のあらわれ、安定した愛の場であるからです。人はまた、「仕事を仕事ゆえに」愛することもできません。仕事によって、み旨に従って地を支配するという大事業に参加することができずからです。この仕事への愛はたしかに人間の尊厳にふさわしいと言えます。しかしながら仕事に対する愛が万一、同じ人間、とりわけ血を分け肉を分けた家族となんの関係もつながらないとすれば、完全な愛とは言えなくなり、仕事は家庭を破壊するものではなく、家庭のつながりを助け、一致の基となるべきなのです。「家族がもつものもの権利」は「労働法」の基礎に明記されていなければなりません。仕事は本来人間のためであって、単なる生産や利得のみを目的にしているわけではないからです。例えば、多くの国で見られるように、目まぐるしいリズムの中で働いている工場勤めの婦人が主人や子供たちの面倒をよくみられないという問題があります。どうすれば満足のいく解決を得ることができのでしょうか。(フランス訪問のときの説教)

説教・講話・書簡等の抄訳

若者よ

一人ひとりの改心が 社会全体を変える

人間としての、
キリスト信者としての希望

親愛なる学生の皆さん、これ程大勢の皆さんが、このような喜びと信頼をもって、カトリック教会の父であり頭である私のまわりに集まって来てくださったことに対して、何と言って感謝すればよいのでしょうか。この出会いが、私たちの心と心、魂と魂の深い結びつきを示すものとなるよう、また、私にとっては忘れがたく、あなた方にとっては決定的なひと時となるよう神にこい願っています。

すでに学生諸君のかかえる問題や望みを知ることができ、私は喜びと同時に感動を覚えました。それゆえ、完全に大人であり、かつ人間としての、キリスト者としての大きな希望のない手であるみなさん方若者たちと信頼しきって話しあいたいと思います。今おわったばかりの典礼に於ける聖書のことばで、みなさんは私の言葉を受け入れる用意ができたことでしょうか。本日の三つの朗読は、これから始める黙想にとって理想的な枠を与えてくれます。みなさん方が洗礼と堅信の秘跡を受けてその一員となった教会は創立時からすべての人々、すべての文化に対して開かれた教会です。歴史の流れの中で屈辱と迫害を受けつつやがて必ず栄光に輝く目的地に到着する教会、聖霊の神秘的な力に活気づけられ、議ることのできない尊厳と「神の家族」となる召し出し、父と子と聖霊の三位一体の神がお住みになる人間の召し出しを人類に啓示する

ことを願ってやまぬ教会なのです。常に若々しく熱心な教会の空気を吸うことによって大きな力を得ることが出来ます。

みなさん方の司教方は最近、みなさん方だけにではなく、両親や教育者にも若者をおびやかす危険に注意するよう促す手紙を送りました。司教方や大人達は若者をおそう危険を知り、精神的な強いショックを受けています。みなさん方の多くは若者を取りまく困難や若者に必要なものを充分に知っています。具体的に言いますと、ものごとをほんとうの名で呼ぶことを恐れず、また預言者エゼキエルの有名なことば、「両親たちが熟しないぶどうを食べたので子供たちの歯が浮く」という言葉にふれ、みなさん方の目上の人々に質問することを恐れませんが。

あなた方は
戦う人となる召し出しを受けている

今日は、大変単純だが大切なことを一つ確認して欲しいと思います。それは、肉体的か精神的かとにかく苦しんでいるすべての人間と社会にあてはまる真理であります。すなわち、病気が必要な薬をとらない限りなおらないうということ。これが、使徒聖ヤコブが初代の信者にわからせたがっていたことでした。(ヤコブ1・23、26参照) 個人のあるいは、集団の良心の鏡に於て悪の診断を下しても、それをすぐに忘れてしまったり、この悪を治す努力をしなければ何の役にも立ちません。社会において一人ひとりが悪についての責任

を持つており、それゆえ、それぞれが改心しなければなりません。そして、この改心は、世界の福音化に参加するひとつの方法なのです。さて、私はあなた方におたずねします。若者がみなそろって自分自身の生活を改めることに同意すれば社会全体が変わる、というのは確かなことではありませんか。みなさん方を苦しめる問題に対してすでに解決策をもっているのになぜ実行をためらうのでしょうか。みなさん方の行動力と想像力、信仰は山をも動かすほどの力があるにもかかわらず。現実をしっかりとふまえ落ち着いてあなた方の理想とする社会への道を共にみつめていきましょう。真実と正義、兄弟愛と平和の上に築かれた社会、人間にふさわしい、そして

神のご計画に従った社会、これらの道はあきらかに諸君が明日の責任をにない、精神的に油断なく警戒できるための準備となる道です。(…)皆さん、心を一つにして生きる勇気を見つけてください。最もつましいレベルでも、最も高いレベルにおいても歴史を押し進める人々とは、人間としての召命を悟りその召命に従っている人々です。探求者、戦う人、建設者としての召命に応える人のこと。あなた方にとって、人間であるとはどういうことでしょうか。これは基本的な問題です。これに対する答えがあなた方の未来とあなた方の故国の未来を決めることになるからです。あなた方の人生を実り多いものとする義務があるからです。(一九八〇 アフリカ)

すれば、叙階の秘跡の目的、つまりキリストに仕えるという責任を果すことができます。みなさんの司祭としての人格は、他の人々と違って一つのしるしであり、一つの示唆を与えるものでなければなりません。この意味でみなさんの司祭としての生活は決して俗人と同じものであってはならないのです。

まず私たちの職務上の種々の行為が私たちを聖化へと向かわせます。つまり黙想したことを伝えること、実践していることを手本にすること、ミサ聖祭においてすべてを奉獻すること、「教会の祈り」において私たちの声を教会のものとし、キリストの司牧的愛に一致すること(…)です。

「司祭の独身性」は、主がお召しになった役目のために私たちが祝別されていることを表わします。キリストに選ばれた司祭は、「人々のための人間」となり、主のみ国のために全てをささげ、心を二分することなくキリストの父性愛を受けいれるのです。(一九八〇 フランス)

司祭の独身性と聖性

